

「人生問題集」

つむじ先生の処方箋



なだいなだ

イラスト 成瀬政博

第二回 毒グモ事件を考える

皆殺しの思想（へつこの間）などと書くと、この文章が掲載される雑誌を読む人には不親切だから、この事件が起こったのが、一九九五年の十一月末であることを、ハッキリさせておく。こんな細かいところにまで気配りをするとは、われながら実にサービスがよい。つむじ曲がり直ったのだろうか。そんなことはどうでもいい。さて何が起こったか。ぼくより若くて記憶力のすぐれた読者は、きつと覚えておられるだろう。そう、大阪の

き添えを食った別の虫たちも、大迷惑だ。

「ぼくらは人間を刺そうと、あるいは咬もうと思つて生まれてきたわけではありません。日本に上陸したのもたまたまのことです。この土地が、環境的にもぼくらに適していて、餌もあつたから繁殖したのです。人間を食べて繁殖したわけではありません。それなのに、人間はどうしてぼくたちを迫害するのですか？」

ぼくはテレビ画面の向こうから、クモのそういう嘆きの声を聞いたような気がした。

しかし、お役人たちの耳に、同じ声が届いたかどうか。

排除の体質。そもそもお役人は、この自然の中にばら撒かれた一センチほどの大きさのクモを、人間が歩き回って、一匹残らず捕まえることが出来る、とでも思っているのだろうか。密林の中のベトコンを殲滅しようとして失敗した米軍の経験は何と想っているのだろうか。しかしこの国の行政の責任者は、本気で、このクモを皆殺しにして、日本の国民の安全を確保することを考えているようであつたし、また日本の素直な人たちは、この行政の行動を、もろてをあげて支持しているようであつた。批判の声は、どっちの方向からもあがらなかつた。となると、一般の日本人も「邪魔者は皆殺し」に賛成の体質と

埋立地で、日本に本来生息していないセアカゴケグモという毒グモが発見されたのだ。雌の体長が一センチ、雄がだいたいその半分というから、あまり大きなクモではない。

さて、ぼくはたまたまテレビでこのニュースを聞いたのであるが、アナウンサーの真剣な顔を見た瞬間、ぞくぞくと不吉な予感がぼくの背筋を走つた。なにか悪いことが起こりそうな気がした。もちろんクモにとつてだ。ぼくはこういう場合、クモの立場で考えるのだ。もちろん素直な人は、人間の立場で考えるだろう。

不幸なことに、もちろんクモにとつてだが、ぼくの子息は当たってしまった。大した盃能だ。誰も寝てくれないから、自分で寝る。翌日からクモの大量殺戮が始まったのだ。テレビは行政が海戦術で捕獲に乗り出したと報じた。なんとという素早さだろう。まだこのクモが日本人の誰も咬んでおらず、そのための死亡者も入院者もでていないというのに。ただ毒を持っているだけで、まるですでに犯罪を犯したかのような扱いだ。

テレビで見ていると、手袋・長靴・覆面で完全武装したお役人たちが、せつせつとこのクモを捕らえ、クモにとつては、地下鉄で突然サリンを撒かれたようなものだ。巻

判断してよからう。

この地上には、一方が他方に害を与えずには生きていけない相手同士もある。だが、住み分けているなら、互いに害を与えないで、共生できる相手もある。そのどちらであるかも判別せず、すぐ排除してしまおうというのは、余りにも安易すぎ、勝手すぎる。種の絶滅の危険はこうしてまた一つ加わる。

阪神大震災以来、危機管理の掛け声で、対応の素早さが評価されるようになった。今回の行政の対応は、素早いといえは素早かつた。その点では及第かも知れないが、このすぐさまの「殺せ、皆殺しにしろ」の対応は、評価を躊躇う。ただ早ければいいのなら、偏見で行動するのが一番いいことになる。それでも早ければいいのだろうか。この対応は、どこか、精神病患者が事件を起こしたときの偏見にもとづく対応に似ていた。精神病者が事件を起こすと直ぐに「狂人を野放しにするな、閉じ込めろ」の声があがる。事件を起こしたのは一人の患者であり、それには個人の事情があつたかも知れないのだが、そんなことは考えようとせず、病人は全部危険だ、閉じ込めろという。これが偏見だ。精神病者をみな潜在的犯罪者と見なして、事件とは無関係の患者まで閉じ込めろと要求するのだ。

犬が人間に噛みついたときもそうだ。犬がこの何千年の間、人類とどのように付き合ってきたか、人間にどのような奉仕をしてきたかを考えようとする。大嫌いのひとは、全部の犬が自分を咬みそうな顔をしているように見えるらしい。忠犬ハチ公も、ここはれワンワンの花咲爺の犬も、名犬ラッシーも、一瞬にしてすべて記憶から抜け落ち、ただ、咬む危険があるかないか、しか問題にならなくなる。この反応は、危険が外国から入ってきたとき、いつそう激しく燃え上がる。それが今回の毒グモのケースだ。

共生の模索 こういう場合、「殺せ、皆殺した」の他に方法はないのだろうか。つむじ曲がりの怪人は、あると考える。共生という方法だ。日本にだって毒をもった動物はいるではないか。しかも、セアカゴケグモよりもっと強力な毒を持ったものが、御存知マムシという蛇、ハブという蛇、それにスズメバチという昆虫などだ。これらを「殺せ、皆殺しにせよ」とはいわない。日本人は長年のあいだに、彼らとの共生の知恵を身につけてきた。そのことが「セアカゴケグモを殺せ、皆殺した。さもないと安心できない」と考える人たちの頭からきれいに抜け落ちている。これまでこれら在来動物に咬まれた

うやら、かなり広い範囲の人にも及んでいるらしい。

クモは虫の世界のユダヤ人 この騒ぎで、なんでも悪は排除してしまおうというのが、日本社会の体質であることがぼの見える。外国は危険がいっぱいで日本は安全だ、といういわゆる安全神話も、この体質とどこか結びついているような気がする。危険なものは外国から入ってくる。それを水際で防がねば日本は危ない。ピストルもエイズも農薬入り食物も、水際で入れないようにしよう。そういう考えの延長にこの毒グモ退治があったのではないか。

気の毒なのはクモである。世の中には理由なくクモが嫌いという人が多過ぎる。マンガでもクモのイメージは悪役のそれだ。

南欧の有名なクモにタランチュラがある。十五世紀ごろから十七世紀にかけて、このクモに刺されたといひ、苦しみ、暴れまわる人間(とくに女性)が多数出て、タランチュラは毒グモとして一躍有名になった。だが、博物学者が調べたところ、この恐ろしい巨大なクモには、人を殺すような毒がないことが分かった。実際には苦しみ暴れていた人は、毒におかされたのではなく、ヒステリー発作を起こしていたのだ。それがクモに刺され

り刺されたりして死んだものはどれだけの数だろうか。かなりいるはずだ。そのいわば殺人動物たちが、日本人の安全のために、皆殺しされ、日本の山野から追い出されたか。日本人は、これらの動物とは、長い経験の末に、共生の道を選んだのだ。それなのに、セアカゴケグモは、見つかったとたん、彼らとの共生の道の模索もせず、すぐさま皆殺しなのだ。なぜか。それが外国から入ってきた動物だからだ。対応のあまりの差にびっくりする。毒を持っていることより、それが「おらが国」に不正入国したことが、もっと重要なことらしい。

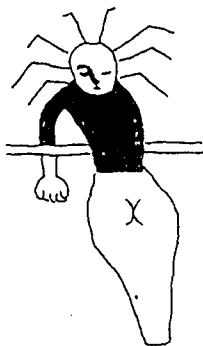
そもそもこのクモが日本に来る前にすんでいた国では、どのような対策が取られているのだろうか。それらの国で、毎年、このクモに刺されて死んでいく人が、いったいどれくらいいるのだろうか。そして、その危険をそれらの国では、どのようにして防いでいるのだろうか。怪くは知りたいが、皆殺しが始まる前に、そうしたことを、ちゃんとコメントしてくれたテレビはなかった。それらの国に旅行する人たちに、このクモに刺されないように注意しろと、これまで親切な情報を流してくれたテレビもなかった。

こんな自己中心的なメンタリティを持っているのは、法務省入国管理局の役人だけだと思っていたのだが、ど

たことにされたのだ。ぬれぎぬだ。農村の女性が裸足で歩いていて、クモと同じ岩の割れ目にすんでいるサソリに刺されたのを、クモに刺されたと同様で信じた場合もあるかも知れない。いくら人間に好意的になっても、それくらいのことしか考えられない。

今度のセアカゴケグモも、少し世の中が落ち着きを取りもどしたところから、一匹だけで人を殺せるような強い毒は持っていないといわれはじめた。クモはスズメバチのように群れを成して人間を襲うようなことはない。生態を知っているものなら常識だ。とすればこのクモは、初めからそれほど危険な存在ではなかったことになる。タランチュラの場合となんと似ていることだろう。

虐殺されたクモの生命は戻らない。たかがクモの命ぐらいというなかれ。大切なのは命そのものより、命をどう考えるかの方なのだ。



池田博明さん

平松毅久さん

提供

八十七号 付録一